

令和7年度

西和賀町議会行政視察報告書

(秋田県五城目町)

西和賀町議会 令和8年2月

はじめに

西和賀町議会では、毎年県外視察研修を行っているが、令和7年度は、本報告書のとおり実施した。

視察先の選定、研修内容に関しては、西和賀町議会議員全員で組織する西和賀町議会町政調査会（高橋宏会長）で決定している。視察先、研修内容は、議員から視察提案書（巻末資料）を徴取し、その提出された調書をもとに町政調査会幹事会、町政調査会全体会にて意思決定をした。

報告書目次

<b>【視察の概要】</b>	-----	2P
<b>【各議員の報告書】</b>		
北村嗣雄	-----	3P
真嶋実	-----	4P
普本歌織	-----	12P
中村ひとみ	-----	16P
高橋敏樹	-----	18P
唐仁原俊博	-----	19P
高橋義彦	-----	22P
高橋宏	-----	23P
柳沢安雄	-----	25P
刈田敏	-----	27P
高橋雅一	-----	28P
<b>【巻末資料】</b>		30P

## 【視察の概要】

1. 視察の主体 西和賀町議会（町政調査会で企画）

2. 派遣期間 7月2日（水）

### 3. 行政視察の目的

西和賀町の抱えている課題解決と議員の資質向上、議会の活発化を図るため先進地の調査研修を実施し、町政の発展に寄与することを目的とする。

### 4. 行政視察のテーマ

(1) 学校を0歳から100歳までの学びの場として活用する「五城目みんなの学校」の取り組みについて

(2) 距離も関係性も越えていく「五城目町教育留学」の取り組みについて

5. 視察先 秋田県南秋田郡五城目町 五城目町立五城目小学校

### 6. 参加者

議員 12人+議会事務局 2人

### 7. 各議員の報告書

次ページ以降のとおり。ただし、様式等は所定のものがないため、各議員から提出された報告書を議会事務局にて書式を統一するなどして一部修正を加え掲載している。

### 8. そのほか

令和7年6月13日 第15回定例会にて「議員派遣の件」を議決。

## 議席番号1番 北村嗣雄(産業建設常任委員会委員長)

五城目小学校の改築事業の経過説明で住民から異論もなくスムーズに事業が出来たことに五城目町教育長の満足げに満ちた説明で、学校を建てる前の取り組みに注目した。

学校を建てる前の取組に全住民を対象のワークショップ、スクールトークの実施、意見聴取。

小学校改築事業の事業経過ごとに用地選定から基本設計で3回、実施設計4回、工事開始3回竣工まで合計10回の全住住民を対象としたワークショップを実施している。民意を重視した行政の取組みの経過であり、行政と住民の一体化を目指した総意結集の五城目小学校の改築事業の経過である。

本町に於いても保育園、学校の在り方が検討中の状況だが、検討委員会での検討のみに成らず全住民参加型の意見交換、議論の場が、極めて大事だと思われる。

地域住民参加の対話から生まれた、五城目小学校の教育環境は、地域の教育現場の拠点「みんなの学校」と称し社会教育講座等が盛んに取行われている。

五城目町立小学校の改築事業は 建築面積 / 4,010m<sup>2</sup>、築工事費 / 2,233,000,000円 . 2020年 竣工している。改築事業の経過ごとに、全住民対象とした意見聴取の業務を並行して取り組んだ校舎は、多様な創意工夫が取り入れている。本町の基本設計にあっても多様に参考に学ぶところが多いと認識する。

本町も今後、用地選定から基本設計、実施構想、設計の取り組みが本格化すると思われるが、検討委員会のみならず、全住民参加の意見聴取検討すべきと思うが、町当局の今後の取組みに注視するところである。

## 議席番号2番 真嶋実(広報編集常任委員会委員長)

2025年7月2日 「学校を0歳から100歳までの学びの場として活用する『五城目みんなの学校』の取り組みについて」、及び「距離も関係性も超えて行く『五城目教育留学』の取り組みについて」をテーマに秋田県五城目町に行政視察に行つてまいりましたので報告をいたします。

### 五城目町の概要

秋田市の北方30キロメートル、能代市の南方30キロメートル、干拓による大瀧村の東方に位置し、県都秋田市まで約40分の距離にある。面積は214.92km<sup>2</sup>で本町の約1/3、人口は本町の1.7倍ほどで約7,700人、人口密度にすると5倍ほどになる。

令和7年4月現在 小学校児童数223名 中学校生徒数146名

急峻な山岳地帯から肥沃な水田地帯まで変化に富んだ農業と林業の農山村であるとともに、五城目・砂沢城は16世紀終期(1590年頃)に築城されたと伝えられ、中心部には約500年の伝統を誇る露天朝市が栄え、製材、家具、建具、打刃物、醸造業と商店街が発達し、湖東部における商工業都市を形成している。

1955年(旧)五城目町、内川村、大川村、馬場目村、富津内村が新設合併し、新たに五城目町として発足。平成の大合併では隣接する井川町、八郎瀧町と法定合併協議会を設置したが2005年廃止し、それぞれ存続の道を選んだ。

五城目町においても高齢化人口減少には歯止めがかからず、全国都道府県の中で最も高齢化の進んだ秋田県の中でも5番目に入る。昨年度1年の人口減少は242人。(西和賀町では181人減)そうした中で関係人口の創出に努めている。ここ数年 地域にキャンパスを持たない「さとのば大学」の地域留学を受け入れている。またJICAの派遣前実習受け入れをおこない、昨年10月には全国で初めてJICA海外協力隊グローバルプログラムに関する連携覚書が締結されている。教育がまちづくりの中心となるとして「世界一子どもが育つ町」を町のスローガンとして掲げる。

## 「スクールトーク」による全住民参加型議論と 合意形成による 小学校改築

五城目町では当初 2010 年完成予定で小学校改築計画を立てたが、財政事情でスタートが遅れる。防災基準の変更もあり立地見直しが迫られたが、建設場所選定の合意形成に時間を要し建設場所決定は 2017 年に。当初は中学校に隣接地を提案していたが、地域とともにある学校が良いと用地を変更した。その前年、PTA 主催のワークショップ「スクールトーク」が行われ、教育委員会がそれを引き継ぎ、だれでも参加できる全住民参加型での議論を続けた。スクールトークに参加できなかった人にも情報公開、フォローをおこないストーリーを共有する取組を続けてきた。この取組は小学校完成までの 4 年間で 10 回実施され、住民の様々な要望を反映した校舎が完成した。話し合いの中で、住民からは地域の人に参加できる学校・地域が見守る学校を望んでいるということが見えてきた。

そもそも学校とはどういうものか。

1. 誰の胸にもそれぞれの学校がある。学校は個人の思い出と強く結びついている。
2. 学ぶことは教科書にないことも沢山あり多岐にわたっている。
3. 学校が続くことが地域の持続に結びついている。地域のアイデンティティが詰まっている。

では学校を建てるとはどういうことか。町と学校、住民と学校の間を再構築する取り組みになった。

スクールトークを踏まえて新しい校舎を使いながら、誰でも気軽に学び集える機会を作るため、学校開放を利用した社会教育講座を展開していくこととなった。「みんなの学校」は新しい集い方を模索する過程で、学校改築事業の際の地域住民の要望に応える形で始まった。言うならば、地域と学校の間を再構築しながら形作られていった取組だ。

建設事業のパートナーには 校舎の設計を担う村田弘建築設計事務所（秋田市）と、五城目町移住の先陣を切った丑田俊輔さん（2014 年 五城目町に移住）が立ち上げた“新しい学びのクリエイティブ集団” ハバタク株式会社が名を連ねている。令和元年（2019 年）から学校施設環境改善交付金事業として小学校の移転改築工事始まる。

「スクールトーク」の取り組みから「超える学校」をコンセプトに「地域に開かれた学校」を目指す五城目小学校校舎は、町の中心部から見渡せ、体育施設など社会教育群と隣接する。玄関は吹き抜けの高い天井、明るい中庭が回遊動線を作り、校舎のどこにいても他社の活動が伝わるよう配慮されている。教室は空間をフレキシブルに活用できるよう壁を無くし、手前には従来の廊下より自由な空間「ワークホール」を配置し、可動式の家具などが空間を仕切っている。

階段教室（従来の視聴覚室機能に加えて表現・発表の場としての機能）も設置し学校全体のあらゆる空間を学びの場として、豊かな学びにつながるよう工夫されている。メディア棟（メディアセンター）は2階に学校図書室を置き、1階は地域図書室（ワークル）として地域に開放している。

また、地域全体を学校としてとらえ、狭い学校空間だけに閉じることなく地域の文化や身近な人との触れ合いを通して新しい発見や深い学びにつながるような体験活動を行っている。

## 距離も関係性も超えて行く

### 『五城目教育留学』の取り組みについて

「教育留学事業」を第2次まちひとしごと総合戦略（R2～6）に新たな目標として設定。制度は2022年度（R4）に始まった。3年間は秋田県と一緒に、今年度からは町単独事業として実施。移住政策の入り口として、また関係人口創出事業として実施。

県外の小学1年生から中学2年生を住民票がないまま、1週間から2週間の短期間、町内の学校に受け入れる「区域外就学制度」。数日から2週間程度を自由に選べて、留学中も元の在籍校で出席扱いになるケースが多いことなどが好評の理由。

親の実家があり、沖縄から帰省を兼ねて留学するリピーターもある。「体育の雪合戦が楽しかった」との声。リピート率も高まっている。子供だけでなく保護者からも高い評価。

暮らしの中で学び、広く町中で暮らしながら学ぶ。

昨年は 30 人。今年も定員 20 名ほぼ満杯。移住につながったのは 1 家族。ハードルは高い。関係人口を増やしたい。

受け入れる側のメリットは、少子化で小・中学校各 1 校、ほぼ同じメンバーで義務教育を過ごす環境の中、留学生が加わることで変化のない構造に刺激を与える。外の価値観に触れる。

「教育留学」につながる移住者を積極的に受け入れる取り組みが先行して行われてきた。

2013 年 10 月「地域活性化支援センター」＝BABAME BASE が、同年 3 月に閉校した馬場目小学校の校舎を活用し開設。

2015 年には「五城目暮らし Walker」発行。

五城目町への移住・定住促進情報サイト「五城目移住宣言」を開設。

※「五城目移住宣言」について、具体的な宣言文があるのか、web サイトの名称と使用しているのか確認できていない。

自律分散的に産声を上げる五城目町の地域共有資源＝コモンズ。

シェアビレッジ＝茅葺き古民家を村に見立て、地域内外の人が村民(会員)になり、地域コミュニティを拡張するという取り組みも 2015 年にスタート。

2016 年 「ごじょうめ朝市 plus+」開始 誰でも小額の出店料で出店できる。

2020 年 3 月にコロナ禍に休業した温泉施設「湯の越の宿」は、2022 年「湯の越温泉」として同施設は復活。

## 学校を 0 歳から 100 歳までの学びの場として活用する 「五城目みんなの学校」の取り組みについて

学校開放を利用した社会教育講座「みんなの学校」は令和 4 年度から始め、本年で 4 年目を迎える。

文部科学省が指針を提示する「地域に開かれた学校」の一つのカタチとして、世代を超えた学びの創出につながり、人づくりが地域づくりにつながるよう取り組んでいる。

社会課題解決のための「社会教育」も、社会課題解決のための人材を育

成する「学校教育」も、どちらも「明日を良くするため、10年後もずっと未来も今より良くするために」教育はある。「社会教育」と「学校教育」の境界を越えて同じ仕組みを共有する取り組みが「みんなの学校」である。

「スクールトーク」で話し合われた学校の姿の一つを実現した、約束を守った取り組み。具体的な取り組みは、学校開放を利用した社会教育講座群。小学校を会場に休日も平日も、子供からお年寄りまで誰でも参加できる。学校授業の開放・社会教育講座を学校の授業にして一緒に学んだり、子供と一緒に下校できる時間に開催したり 気軽な参観日のような役割も果たしている。

行政の取り組みを社会教育として 例えば、公共交通の問題を実際に路線バスに乗りながら考える講座や、医療や介護について考える健康づくりに関する講座、統合した旧学区から気軽に新しい学校に来てもらうなど、社会教育テーマを共有。

毎年 30 講座ほど様々な内容で講座開催。これまで隣町の町長が互いの町を分析するという講座も。体験講座として、学校で任天堂スイッチで遊ぶ講座も開設。保護者が習った先生「あの先生は今!？」など。全体の雰囲気を持続しつつ一つの講座に複数の意味を持たせ様々な見え方がするように工夫。様々な教育をパッケージにして学校通信にしている。講師は町と何らかの接点を持つ人。町のフィールドにある教育的断面を切り抜いてパッケージにして見える化している。町のフィールドにあるものを教育としてピックアップして見せている。

本年は 11 月 全国朝市サミット開催に合わせ、社会教育講座としてコミュニティビジネスの観点からその魅力や出店方法を説明する講座を開催。朝市を盛り上げる自立した住民活動も紹介。

学校教育では 3 年生の総合の学習の時間、ふるさと教育の一環として大人と子供が同じ授業を受ける。平日 学校で社会教育講座を開催。そこに学校教員が立ち会い授業としても成立。G I G A スクールの紹介では保護者よりも地域からの参加が多かった。

この取り組みは新しい分野や新しい領域に「学びの旗」を立てるような取り組み。都市部に比べ、公教育以外の民間プログラムが不足しがちな地方で、多様性にこたえる教育のカタチとして公的な学びを広げている

といえる。新しくたった旗のもとに接点のなかった人同士が同じことに興味を持つことでグループ化が起こる。友達になる機会が生まれる。開かれた教育が、より教育を社会に開かれたものにする。

個人個人が多様性に満ちて、様々な要望に応えられる町が住みやすいと考えていて、広義の意味での街づくりの機能を持っている。人づくり・繋がりづくり・地域づくりという社会教育のあるべき姿を実現するための 補完的役割を持った事業。

ラーニング・ハブ (Learning Hub) という事業も立ち上げている。

取り組みの評価から JICA 研修地に選定 地域課題を考える取り組み「グローカルプログラム」が小・中学校と連携。関係を超え、関係がつながる。学校を中心に広がっていて、国際開発 J I C A まで超えてつながっていて、それが地域の小・中学校と連携していく。=超えて・つながった関係が再び学校や地域に還元されていて、また五城目町の教育環境を豊かにしてくれている。

まさに町のすべてが境界を越えた学びの場となり、相互に作用する学びあう環境が地域そのものを活性化・成長させていると言える。これが五城目町教育委員会がデザインしてきた、学校空間を超えた、地域を超えた、大人も子供も超えた教育環境の姿。

いろいろなシーンで様々なレベルでの「超える」が起きている。それをまた、大切に集めて、次の教育環境を構築していく。その境界もまた超えていく。教育環境そのものが広がっていく。

決して混ぜるのではなく、境界があることが大事。教育環境が広がっていても境界があるから小学校は小学校としての機能を高めていく。境界があるから学校が選んだものを学校で取り組むことができている。

## 五城目町教育委員会からのまとめの報告

未来の教育環境を確保する学校建築ということで、これまでの取り組み「スクールトーク」は散らばった・広がった様々な価値観を集約する、教育の価値観をつなぐ働きをしてきた。

それを反映して学校建築が行われ、次の時代の教育が展開される。学

校建築から次の教育が始まっていく。建築は過去と未来の間であって、両者をつなぐ歯車のようなもの。

これまでの取り組みが全住民参加型だから、地域と対話した・地域と向き合った学校となる。全住民参加の対話があるから皆が主体の学校となる。

もう一点、教育環境とは川のようなもの。

「みんなの学校」で専門家から教わったこと

「持続可能な状態とは、過去から続いているもので、これからも続いてほしいとっていて、それを保持する仕組みがあること、つまり川のようなもの」なので教育環境とは川のようなもの

五城目町は特別な町ではない、特別な取り組みをしているわけではない。「スクールトーク」にしる「みんなの学校」にしる「教育留学」にしる特別難しい手法をとっているわけではない あくまで町の一つの例。取り組みの特色は、住民の意見を反映させた無理のない自然な制度設計にある。地域に既にある 地域の要素を、地域住民の希望や願いを大切に拾い集めて、新しい環境に紐づけていく取り組みをしてきた。このことが地域に根差した教育として展開され、様々な支援を乞いながら、次の教育環境を豊かにする作業を生み出している。丁寧な対話が教育環境を持続可能にしている。

## 所感

五城目町は歴史ある城下町に裏打ちされた、文化と産業の伝統、豊かな自然環境を背景としながら、現代社会の少子高齢化と向き合い、積極的に移住者を受け入れ 新たなテクノロジーとも向き合いながら独自の街づくりをしている。

特にも今回視察させていただいた小学校改築移転と、新しく建築された小学校を核とした「教育移住」「みんなの学校」の取り組みは、教育＝人づくりがまさに町づくりの根幹であることを感じさせた。

全住民参加型での「スクールトーク」を重ね、地域と対話し・地域と向き合うことで、散らばり・拡がった様々な価値観を集約し、教育の価値観

をつなぎ、未来への教育環境を豊かにする作業を生み出している。

教育委員会からのまとめの報告に合った通り 特別の手法をとったのではなく、地道に地域住民の希望や願いを大切に拾い集めて、新しい環境に紐づけていく取り組みが町民皆が主体の学校を築いている。

差し迫る、西和賀町の学校再編において町議会も全住民参加の一角として、積極的に対話に参加し、持続可能な町の人づくり・地域づくりの環境を築いていかなければならない。

## 議席番号3番 普本歌織

### はじめに

今、西和賀町では、小中学校を含めた教育環境のあり方について検討を行っている。「校舎の老朽化」「少子化」で仕方なく、ということではなく、町の子どもたちにとってよりよい教育環境とはどのようなものか、地域にとっての教育施設の役割とはどのようなものかについて、町民自身が考える機会になることが望ましいと考える。

その先行事例として、去年は福島県大熊町の教育施設『学び舎ゆめの森』を視察した。今年度は秋田県五城目町立五城目小学校を視察する機会に恵まれ、町民の願いから生まれた学校で、子どもたちがいきいきと学ぶ姿を目の当たりにした。五城目小学校の「みんなの学校」「教育留学」の取り組みについて考察する。

### テーマ①学校を0歳から100歳までの学びの場として活用する「五城目みんなの学校」の取り組みについて

#### <スクールトーク>

五城目小学校は建設に際して、「スクールトーク」と呼ばれる3年間の町民の話し合いを経て、学校が建設されたというところに、大きな意味がある。五城目町教育委員会発行のパンフレット『こうして生まれた！新校舎づくりの軌跡』には、「新校舎建設は次世代へのプレゼント」という表現があるが、このような考え方で校舎建設とそのためのスクールトークを行ったことは本当にすばらしいし、今後の西和賀町の教育環境を考える時にもこうありたいものだと考える。

スクールトークの始まりは、PTA主催のワークショップで、その充実した話し合いがその後のスクールトークにつながったということである。校舎完成まで実に10回の住民によるワークショップが行われたというから、驚きである。

スクールトークは中間組織である株式会社ハバタクの企画、運営のもと行われた。議論の場の他に、敷地の散策などの体験の場、話し合いを目

に見える形にするなど、町民が興味をもちやすく、参加した人もしていない人も経過を共有できる仕組みで、多くの町民が何らかの形でかかわることができる工夫がされていた。西和賀町でも学校建設の際の、住民との懇談や意見収集の参考になるのではないか。

### <町の姿勢>

こうした取り組みを行う上での五城目町の姿勢について、教育委員会の説明の中で「住民の希望や願いを拾い集め、つなげる」「難しいことではない」という言葉があったが、多くの場合それが難しく、結果行政の進めやすい形に収まってしまふことが多いのではないか。

町民から意見を収集する場合、町側の懸念として、「様々な意見が出すぎて收拾がつかなくなる」という声を実際に聞いたことがある。五城目町の取り組みでは、実際に様々な声が出たようだが、それを「一人ひとりにとって学校とは」「だれの胸にもそれぞれの学校がある」「地域のアイデンティティが詰まっている」と捉えるところから始まっている。こうした捉えがあることで、様々な意見がでることを前向きにとらえることができるのではないかと感じた。

### <校舎>

校舎を見学させてもらうと、あらゆるところに“町民の声”が反映されていることが分かった。「開放的な玄関（昇降口）」「プレゼン能力を育てる階段教室」「互いの学びの姿が見える教室の配置」などである。それでもまだ、これで完成ではなく、まだ反映しきれていない声があるので、徐々に改善していきたいとのことだった。

どの教室もフリースペースと繋がるようにできており、授業によって多様な使い方ができるようになっている。このことで、多様な学びの形が保障されている。

### <みんなの学校>

これも、スクールトークで話されたことが実現した、住民との“約束を果たした”取り組みであるとのことだ。学校が「0歳から100歳までの学びの場」としての役割をもっている。学校の授業を住民に開放して一

緒に学ぶ取り組みで、保護者にとっても子どもと一緒に下校できる時間に、気軽な参観日のように参加できるようにするなどの工夫がある。

町の小中学校の授業も体験的な内容など、大人でもやってみたい、と思える授業を行っていると感じる。また、子どもたちが実際に学んでいることを大人になった今、又学ぶことで新たな発見がありそうだと感じることも少なくない。地域の人や保護者も一緒に学び交流することで、大人も子どもも楽しく、互いに多様な学びができる場になるのではないか。

またこれは、町にあるもの（文化、伝統、産業など）を教育としてピックアップして見せる役割もあるとのことで、確かにそういう見方をすることもできる。地域の良さを、住んでいる者たちがなかなか気づけないということはよくある。住んでいる人自身がよさに気づくことは「ここに住んでよかった」と感じることにつながるし、そのことが町外に魅力を発信する力にもなるだろう。

## テーマ②距離も関係性も越えていく「五城目町教育留学」の取り組みについて

五城目小学校は「超える学校」をコンセプトに、様々な取り組みがなされているが、教育留学の取り組みも「超える」を軸として取り組まれている。秋田県の教育留学のプログラムの一つであり、住民票のない子どもも一定期間五城目小学校に通うことができる。

学校と地域、地域と地域など、境界をなくしていくのではなく、境界があることでその内部が充実する、そして時にそれを「超える」ことで新たな価値が生まれるのだということであった。留学してくる児童はもちろん、受け入れる五城目の子どもたちにとっても、自分たちとは違う価値観に触れ、楽しさや学びがあるのだという。

西和賀町でも小中一貫校にした場合、9年間同じ環境で過ごすことを考えると、新しい価値観に触れる機会として、教育留学の可能性を考えてもよいのではないだろうか。

## まとめ

西和賀町で新しい教育環境を考える場合に、これからの地域コミュニティのことを考えても、また学校という多くの町民が思い入れの深い場所をつくり直すということを考えても、地域の人たちの思いを十分受け止め、取り入れながら進めていく必要がある。五城目町のそこを丁寧に作り上げていった過程、その成果を取り入れるべきではないか。また、実際の利用者となる保護者や子どもたちの思いも取り入れ、「次世代へのプレゼント」という視点で作り上げていくことが必要なのではないだろうか。

## 議席番号4番 中村 ひとみ

令和7年7月2日、人口約7000人の秋田県五城目町の「越える学校」五城目小学校を視察しました。令和6年度は200人程が視察に訪れている。

様々な垣根を超え、地域や世界と繋がる教育の取組みにはまだまだ無限の「越える」がありそうに感じがする。

五城目小学校の基幹となる取組みは教育委員会 生涯学習課が主催する住民参加型の社会教育「みんなの学校」や地域を超えた全国初となる「グローバルプログラム」や関係人口拡大を見据えた柔軟な「教育留学」である。

### 1. 学校を0歳から100歳までの学びの場として活用する「五城目みんなの学校」の取組について

学校開放を利用した生涯学習の取組として「みんなの学校」社会教育講座がある。

世代も性別も超え若いも若きも学びを通して交流することができる。

情報共有することで地元を深く理解し住民同志の連帯感や若年層の地元愛が高まるのではないかとと思われる。

毎年刷新される「五城目みんなの学校」と題した学習案内は、カラー小冊子で画像や講座内容が分かり易く纏められており、受講したいなどと思わせる工夫がされている。

担当課からの説明で、これまでの受講者の推移についてはデータが無いとのことだったが多くの町民が受講されていることと察する。

本町の「生涯学習まちづくり出前講座」では5人以上からの予約制で講座内容も例年通り。

町や議会が主催する懇談会や報告会でも町民がなかなか集まらない状況を考えると予約制は効率的なのだろうが、南北に長い本町において、住民が世代を超え、距離を超え、集い学び、交流しあえる場の創出として五城目町の「みんなの学校」の事例から学ぶ点は多いにあると考える。

## 2. 距離も関係性も超えていく「五城目町教育留学」の取組について

五城目小学校の校舎は木質建築でシンプルだがとても洗練された造りで、外光が大きな窓から差し込み白い壁が際立ちとても明るい。学校と隣接する公園へは子供たちが自由に飛び出していける。

校内ツアーの際に、のびのびと明るく元気に授業をする子供たちがとても印象的で見知らぬ人にも明るく挨拶してくれるオープンマインドな雰囲気は五城目町小学校の教育留学による成果なのか。私自身もほっこり笑みが零れた。

様々な境界線を「越える」校舎設計が特徴だが、中でも階段教室は、子ども達のプレゼン能力が育まれるようにと設計された。この階段教室は「みんなの学校」を利用する住民の教室でもある。

五城目町の「教育留学」は人口減少への挑戦、関係人口の拡大を追求し区域外就学制度を活用した地域居住促進の取組みを行っている。

1. 住民票の無いこどもも通える制度
2. 移住者未満の滞在者や祖父母の田舎を訪れた一時帰省者
3. 全国初となる J I C A 海外協力隊グローバルプログラムによる留学生の受け入れ

グローバルプログラムの覚書締結の際、五城目町渡辺町長の挨拶では「人口減少が進む中でも活気ある土地であり続けるための取り組みを進めている」と述べている。

添付資料：文科省「令和の日本型学校教育」を推進する学校の適正規模・適正配置の在り方に関する調査研究協力者会議の事例として

### [【資料2】猿田委員御発表資料](#)

## 議席番号5番 高橋敏樹

### 視察内容

- 1 0歳から100歳までの学びの場として活用する「五城目みんなの学校」の取り組み
  - ・五城目では、学校が町民の生涯学習の校舎となっている
- 2 距離も関係性も超えていく「五城目教育留学」の取り組み
  - ・県外の小中学生を短期間（1～2週間）学校に受け入れる制度

### 所感

率直に五城目町の取り組みは素晴らしいと感じた。「みんなの学校」は町民にとってかけがえのない場になりうるし、「教育留学」は、留学生とその家族と町民どちらにとってもかけがえのない場になりうる。

どちらの施策も本町でも是非取り組んでいくべきだと感じたが、その上で、本町で取り組む際には、ただ真似をするのではなく、本町に合った方策を考え、実践していくべきとも感じた。歴史や風土、全て同じではないのだから。「(仮称)西和賀流・みんなの学校」は、町民の学びの場がふくらみ、町民が幸せに暮らせる一助になるために、未来を見据えて考えていかなければならないと思います。また、留学生を受け入れるには、相当な準備が必要だが、近い将来の交流人口の増加（にしてい）を考えると、「(仮称)西和賀流・教育留学」は、すぐにでも着手するべきだと思います。

## 議席番号6番 唐仁原俊博

学校づくりは建てて終わりではなく、ずっと続く

### 新しい学校は議論がもとになって生まれた

予算を編成するのが行政である以上、公立学校のあり方を最も左右するのは行政だ。ネガティブに言えば「行政の考え方の枠のなかに収まった学校しか建たない」し、ポジティブに言えば「行政が本気で『魅力的な学校を建てる』と覚悟を決めれば、教育移住を見込める学校が建てられる」はずだ。

では、どうすれば行政は覚悟を決められるのか。住民や議会が後押しすることに加え、住民と議会が「学校ができたあとも主体性を持ってかわり続ける」という意思を示すことが欠かせないのではないか。

昨年度、議会は大熊町立学び舎ゆめの森への視察を行ったが、今年度も引き続き、教育機関に対する視察となった。ゆめの森と五城目小学校は、あるべき学校の姿を議論しながら、それを実現するための施設を設計した点が共通している。

### 多様な価値観を反映させた学校

五城目町では、新校舎設立に向けて、市民と行政のワークショップとして「スクールトーク」が実施された。

この「スクールトーク」の特徴として、「1、全住民参加型」「2、先進事例の紹介」「3、参加者同士の意見交換」「4、議論の場／体験の場」「5、ストーリーの共有」「6、キャッチコピー」の6点がある、と説明を受けた。

そのうち、私が特に共感したのが、「全住民参加型」という点だ。保護者や教員に加え、地域、そして移住者も巻き込んで、どんな学校がふさわしいのかを議論したという。

私自身、2019年に西和賀に移住してきた身だ。しかも、子どもはいない。属性だけを考えれば、「新学校建設の議論とは関係ない」と言われてもおかしくない。

しかし、五城目町では、「学校には地域のアイデンティティが詰まっている」という考えのもと、単に「新校舎を建築する」のではなく、「学校

と地域・社会の関わりを再構築する」ため、幅広い層の多様な価値観を反映させるべく、開かれた議論を行った。

学校は、第一に児童・生徒のためのものだが、同時に公共施設であり、行政と住民の考え次第では生涯学習施設にも、住民同士の交流の場にもなる。

平成中期に学校を現場にした痛ましい事件が続いて起こったことで、学校は一度、校門を固く閉ざしてしまった。

しかし、児童・生徒数が少なくなった今、再び開いた学校を作ること、児童・生徒にとっても、地域住民にとっても、お互いに刺激を与えあうという意味でも意義のあることだろう。

### なぜ開かれた議論が必要なのか

開かれた議論を真面目に行おうとすると、信じられないくらいの手間がかかるし、主催者側は心身も消耗する。新しい参加者がいれば、これまでに何度も説明したことをまた説明しなければいけない。又聞きや曲解をもとにした意見をぶつけられることもある。それまで議論で積み上げてきたものに対してリスペクトすることなく、「そんなのダメだ」と一方的に言う人もいる。

それでも、西和賀のように財政難の地域ほど、開かれた議論をもとに、「自分たちは、どういう価値観に基づいて、何にお金を使うのか」を深掘りする必要があると、私は考える。

議論というのは、「誰かの意見を通す」ために行うのではない。同時に「全員の意見が通る」こともない。それでも、意見の違いがあることを認識し、意見の違いがなぜ生まれているのかを理解し、異なる価値観同士で、一致点を見出すのが議論だ。

開かれた議論も、「正解を見つける」ために行うのではない。参加者が「一定の納得」をしたうえで、次のステップに進むために行うものだ。

### 正解はない、続けるのみ

そもそも、今の世の中、正解なんてものはない。

国全体で人口減少が起こっている今、多くの自治体がそれぞれの魅力を打ち出して、関心を持ってもらおうとしている。

西和賀町においては、教育移住を呼び込むことを前提としたまちづくりが必要だと、私は確信している。

しかし、学校ひとつ取っても、ゆめの森、五城目小学校、軽井沢風越学園、安平町立早来学園などなど、全国的に注目される事例がどんどん出ている。

それだけ競争がある状況では、「これなら町外から見ても魅力的なはずだ」とやってみたことが、必ずしも成功するとは限らない。言い訳を探したところで、使ったお金は返ってこないし、「うまくいかないから、もうやめよう」と諦めれば、その時点で終わりだ。やり方を修正しながら、成功するまでやり続けなければいけない。

この「やり続けられるか」ということこそ重要だ。

正解がない世の中だからこそ、「自分たちはこんな学校・地域がいいと思う」という考えのもと、自分たちにできるやり方で実現を目指している様子を町内外に発信して、仲間を増やし、さらに実現を近づける。そういうサイクルを続けていける町にしなければいけない。

#### 参考

『常識を “越える学校” を 町民の手で作る』

<https://turns.jp/38393>

移住者であり、五城目小学校の新校舎づくりにもかかわった丑田俊輔さんへのインタビュー記事

## 議席番号7番 高橋義彦

昨年の福島 大熊小学校に続き、先進教育の推進地、秋田の五城目小学校への行政視察。

学校の統合、新校舎建設となると自治体主導が一般的だが、ここ五城目町は違っていた。

2017年3月、五城目町PTA連合会がワークショップ(WS)を主催した事に始まり、新校舎完成の2021年までに、全町民を対象としたWSが10回、教員WSが4回も開催され、その間には学校建築の第一人者や教育制度の専門家、コミュニティスクールの元祖なる先生など、多くの講師を招き講演が行われ、WSに設計事務所も加わり、町民の意見や思いが設計に反映される等、新校舎建設に留まらず学校を中心とした町おこしへと発展して行く。開校2年目からは、県の支援を受け小中学生の教育留学を開始し、教育移住を誘導して行く。学校開放を利用した社会教育講座「みんなの学校」を開校。気軽な参観日のように、子供や孫と一緒に学び、下校出来る時間帯での設定で、その多くは施設の目玉?「階段教室」で開催されている。

昨年視察した大熊小学校の施設、取組み、何よりも子供達の目の輝きに感動させられましたが、五城目小学校も同様。当町においても小中学校建設が予定されておりますが、当局による説明会の開催のみならず、地域の将来像を考慮した建設構想創りに、十分な時間を掛ける必要性を強く感じ、今後の動向に注視して参ります。

**議席番号8番 高橋宏議員(町政調査会会長)****1. 0歳から100歳みんなの学校について**

西和賀町では現在保育所・小学校・中学校の建設が予定されております。このような中で今年度の行政視察は2020年に新しく小学校を建設された秋田県五城目町を訪れることとしました。

五城目町では小学校建設の3年前から全住民対象のワークショップ兼スクールトークを計10回行い、住民参加型で新しい学校建設に取り組んだとのことでした。自治体ごとでの事情はあると思いますが、よく聞くパターンとして検討委員会を設置し1年ほどで答申を受け、当局案を作り住民・保護者の説明に1年ほどというスケジュールではないでしょうか。西和賀町でもほぼこのようなスケジュールで進めてきております。

そんな中で事前準備に3年かけ、全住民参加のスクールトークを行い、参加者同士の意見を否定せず、それぞれの価値観を活かすことに重点を置いてきた取り組みに感心しました。その中から生まれた校舎設計が校舎全部が学び舎、地域とシェアする校舎となり完成しているものと理解しました。西和賀町でいう教育委員会の学務課と生涯学習課が垣根を超え、0歳から100歳以上でも通える学びの場、みんなの学校ができたのだろうと感じました。準備に時間をかけたからこそ五城目町教育長が言われた「町民はおらほの学校と言います」との言葉に非常に深い意味を感じました。

西和賀町は合併町村ということもあり、少子化と校舎老朽化が進み住民との議論に十分に時間をかけたかに疑問が残ります。しかし、建設はこれからですし、供用開始までまだ時間があります。住民の思いと町の方針を互いに理解し合い「おらほの学校」と言われる学校建設に議員として協力すべきと再認識しました。

**2. 教育留学について**

五城目町の教育留学は秋田県の委託事業として2020年から開始している事業でした。対象者は小学1年生から中学2年生まで。留学期間は1週間から2週間程度。この事業に参加した1家族の移住もあるそうです。西和賀高校も昨年より県外募集を開始し、人数は少ないですが、問い合

わせも多く非常に可能性を感じているところです。

西和賀町でも小学生から中学生の短期留学が実現できれば、その子どもたちが西和賀高校に通学してくれる可能性が広がるのではないのでしょうか。また、単に都会から子どもを呼び関係人口、移住者を増やすことを目的とするのではなく西和賀の子どももまた県外に留学し、視野を広げ自立心を育てる教育を目指すことが西和賀の子どもたちには有益ではないかと考えます。

**議席番号 10 番 柳沢安雄(総務教民常任委員会委員長)**

五城目小学校の視察は、これから小中一貫校の建設計画を見据えている本町の一員としてとても参考になることが多かった。そしてまた、五城目小学校は、ソフト面、ハード面をバランスよく進めることでより効果的な学校づくりを実現していると思った。

まずソフト面のことをあげるならば小学校新校舎を作るにあたり学校関係者だけでなく全住民参加型の話し合いの機会を設け町民の意見や思いを学校づくりに反映してきたことだ。子や孫が小学生にいない町民も小学校に対する意識を共有し今後の小学校にも関心を持ち続けることに繋がっていることだ。開校後も町民の方々に長く関心を持っていただく方法として「社会教育講座」を学校授業にして大人と子供と一緒に学ぶ場を設けたり、図書館やスペースを町民に開放していることについても関心した。加えて、地域を越えた学び合いとした「教育留学」についても非常に興味深い取り組みだと思った。これらのようなソフト面の取り組みは、本町の学校と地域住民とのコミュニティとして参考にすべき施策だと思った。

次にハード面としては、木のぬくもりを感じる内装、全館冷暖房完備と体育館の床暖房採用等といったように子供たちが学ぶ環境が整えられ空間が充実していて素晴らしい教育環境であると思った。

このようにソフト面、ハード面を両立することが学校づくりには、大切なことだと思う。物理的に整備するだけでなく、地域住民との活動や交流を促進するソフト面を充実させることで、より魅力的な学校・地域を創造することができるのだと改めて感じた。

さて、本町の湯田小学校は、学年を仕切る壁があるもののドアはなく2クラスの横には、オープンに使える共有のワークスペースがある。今から38年前に建設された校舎のだが、当時は、ずいぶん先進的な造りだという印象を持っていた。現在もオープンな造りが新奇なデザインの様に取り上げられているが、38年前に既に本町で取り入れていたことは、この町独自の取り組みとして大いに賞賛すべきことではないだろうか。このことから先進的なことを真似るだけでなくこの町の風土や文化に合った、そして地域住民の暮らしを向上させるような独自の取り組みも思

い切って進めるのも良いのではないかと感じた。

最後に本町の学校づくりにおいては、「地域共生社会」の理念を意識していくことが良いのではないかと思う。

## ○議席番号 11 番 刈田敏(副議長)

令和7年7月2日、五城目町での視察研修について所感を述べたいと思います。

今回の視察研修で注目した点の一つは五城目町全体の面積214.9㎏五城目小学校が竣工された2020年の人口(国勢調査)によると8538人この状況下で五城目小学校一校とした住民の思いと考え方はどのようなものだったのか当然プラス面、マイナス面はあったのだと思うが結果を導いた背景については大いに参考となった。特にも「スクールトーク」「みんなの学校」「教育留学」については再度検証が必要と考える。欲を言えば町の歴史、風土については「五城目朝市」についてももう少し深掘してもよかったと思ったところだ。

西和賀町と比較してその違いと今後に対する議会の考え方としての成果を集約し、今後に向けさらに議論することが望まれる。そして本町の教育がより良いものになるよう計画的に進めていくことが求められる。

## ○議席番号 12 番 高橋雅一(議長)

### 視察研修項目

#### 1. 学校を建てる前の取組について

##### ○スクールトークの特徴

- |             |            |
|-------------|------------|
| ①全住民参加型     | ②先進事例の紹介   |
| ③参加者同士の意見交換 | ④議論の場/体験の場 |
| ⑤ストーリーの共有   | ⑥キャッチコピー   |

#### 2. 実際の建築

学校を建てる・・・地域・社会との関りを再構築する事、校舎ぜんぶが学び場、様々な境界線を「越える」校舎設計

#### 3. 現在の五城目町の教育展開

五城目みんなの学校・・・教育の境界を越えて同じ仕組みを共有する取組。

学校開放を利用した社会教育講座

社会教育講座を学校授業に・・・同じ学習内容を大人と子供が一緒に参加することで、地域に開かれた教育を展開。社会教育講座を実施し、教員の立会で学校の授業として成立させている。

### 研修内容(概要)

視察研修目的の「五城目小学校改築事業の経過」について資料並びに映像により詳細な説明を頂くと共に五城目町の教育並びに教育留学について丁寧な説明を頂きました。その後、特徴ある小学校各施設を案内頂きました。

#### 【研修所感】

五城目町には、だいぶ前「杉沢交流センター」や「農家レストラン清流の森」の取組による地域づくりを学ぶため、集落研修として何度か訪問しております。

何といたっても五城目朝市、増田の朝市は西和賀でも有名です。私は朝

市こそ年間を通した、地域づくりの伝承活動と捉えています。

朝市により地域にある自然の恵みや農業の取組や地域文化を今日まで残し次世代に継ぐ重要な取り組みと感じております。

町議会として、現在進められている学校建設を人口減少が進む西和賀町の将来を見据えたものにすべく、視察研修先を先進的な取り組みとして評価されている五城目町「五城目小学校改築事業」の取組経過を視察致しました。

私は、研修項目の詳細説明を伺い、全町民参加型の学校建設が進められて来た事に感動致しました。

研修項目の 1. 学校を建てる前の取組や 2. 実際の建築に於いては、校舎ぜんぶが学び場・様々な境界線を越える校舎の設計 3. 五城目町の教育展開へと繋がり この事が「五城目みんなの学校」教育の境界を越え、学校開放を利用した社会教育講座の展開。同じ学習内容を大人と子供が一緒に参加することで、地域に開かれた教育を展開する等学校建設が全町民参加のまちづくりに繋がっておりました。

特に0歳から100歳まで通える学びの場を目指す取り組み「みんなの学校」は全講座無料の取り組み等、当町にとって学ぶべき実践が数多く取り組まれており短時間では学びきれない有意義な研修でありました。

【巻末資料】

(1)行政視察提案書の様式

令和7年度の行政視察（議決を必要とする視察）提案書

項目		記入欄
1	提出日	
2	提案者	
3	視察すべき本町の課題	
4	担当課職員の同行	必要あり・必要なし →必要ありの場合
5	視察先都道府県、自治体名、地区名	
	視察する施設、組織、人物等	
	視察の内容	
	視察先に選定した理由	
	視察先と本町の主な指標の対比	西和賀町 人口:4800 面積:590.7 km <sup>2</sup>
	概算費用	一人あたり
	参考URL	
6	視察後の活動、目標	